

2011～2016 年度に実施した群馬県上野村における小型哺乳類生息調査

木村敏之（群馬県立自然史博物館）

群馬県立自然史博物館では 2011 年度より昨年度まで第 6 次及び第 7 次自然史総合調査として群馬県上野村（およびその周辺地域）の調査を実施した。本研究はこの自然史総合調査の一環として実施された上野村における小型哺乳類の生息調査の結果を報告する

調査はシャーマントラップを使用し、エサはオートミールを用いた。いずれの調査も 1 晩のみの調査で、調査初日の午後にトラップを設置し、翌日の午前中にトラップの確認・回収を実施した。本調査では上野村全域（ただし国有林を除く）を対象として、村内の合計 46 地点において調査を実施した。本調査の主目的は上野村内における小型哺乳類の分布調査であるため、多くの調査地点では 1 回のみ捕獲調査を実施したが、一部の調査地点では同時期の複数年あるいは同年で連続した期間において複数回の捕獲調査を実施している。

調査全体では 4583 トラップを設置し、アカネズミ 177 個体、ヒメネズミ 129 個体、ハタネズミ類 62 個体、ヒミズ 14 個体が捕獲された。調査全体を通しての捕獲個体数の変動は 2012 年夏期と 2016 年夏期に顕著な捕獲個体数の増加が見られる。またこれらの年では夏期と冬期での顕著な捕獲個体数の変化が見られる。その一方で、2013 年、2014 年は夏期と冬期での捕獲個体数の顕著な違いは見られない。また夏期の捕獲個体数自体も少ない。上野村地域における個体群動態としては、およそ 4 年周期での個体群（特に夏期の個体数）の増加パターンが見られる。さらに例外はみられるものの大まかな傾向としてはおよそ 2 年周期の小さな波と、5 年周期の大きな変動が観察された。捕獲個体数では、変動が最も見られるのはアカネズミであり、その捕獲個体数の増減が全体の捕獲個体数の変動に強い影響を与えている。またハタネズミ類は 2014 年以降に多く捕獲されるようになった。

調査のうち特定の 3 地点において継続的な捕獲調査を実施した。これらについて捕獲個体数の多い夏期での捕獲個体数について調査年ごとの比較を行うと、2012 年は捕獲個体数が最も多い一方で、2013 年は比較できる他の年(2012, 2016) に比較して捕獲個体数が少ない。2014 年も 2012 年に比較して捕獲個体数が少ない。その一方で冬季の捕獲個体数は、もともと捕獲される個体数が少ないこともあり、年ごとの顕著な捕獲個体数の差は見いだされない。2016 年は冬期から夏期にかけて継続的に捕獲調査を行った。その結果、捕獲個体数はいずれの地点でも夏期に向かって増加する傾向が見られた。いずれの地点でも捕獲されたのはアカネズミ、ヒメネズミ、ハタネズミ類、ヒミズである。種ごとの捕獲個体数の変動では、特にアカネズミの捕獲個体数の増加が顕著である。その一方でヒメネズミでは 3 地点の内の 2 地点のみで同様の捕獲個体数の増加が見られた。ただし、捕獲調査全体での（つまり捕獲地点は異なる）捕獲個体数の変動を見てみると、2013 年、2014 年では夏期と冬期での顕著な捕獲個体数の違いは見られない。前述のように調査全体での捕獲数の変化は周期的な変動のようにもみえるものの、全体の捕獲個体数の変動については、それが調査自体の誤差によるものか、本来の年変動によるものかの判断は現時点では困難で有り、慎重な検討あるいはさらなる調査データの蓄積が必要であろう。